

# 図書館報

第124号  
平成21年2月27日  
大分工業高等専門学校  
図書館  
大分市牧1666番地  
TEL 097(552)6084  
FAX 097(552)6786



初春の青き海と空 (千葉県房総半島東岸九十九里が浜からの眺望)

## 〈もくじ〉

題字「図書館報」	( 校長 大城桂作 筆 )	1	
扉写真「初春の青き海と空」(千葉県房総半島九十九里が浜)	図書館長補佐 相本正吾	1	
学科推薦図書を紹介	一般科目文系	2	
「第44回大分県高等学校図書委員研修会に参加して」	制御情報工学科3年 梨子木亮太	3	
「小さな自慢」	都市システム工学科 亀野辰三	4	
「これからの図書委員会」	制御情報工学科5年 鈴木克也	4	
本校留学生の地域でのスピーチ「大分の思い出」	電気電子工学科5年 ジャヴェッド	5	
	「モンゴルの家庭」	制御情報工学科3年 アリ	5
思い出の一冊「ひとりっ子」	制御情報工学科 徳尾健司	6	
	「デカルトの密室」	電気電子工学科5年 工藤宏幸	6
私の推薦する図書			
「スカイネットの超極限!!ナンプレ 超難問編」	制御情報工学科 金田嗣教	7	
「10年後の自分が見えるヤツ 1年後の自分も見えないヤツ」	制御情報工学科 松本慎平	7	
平成20年度読書感想文コンクール入選者		8	
平成20年度貸出上位者・クラス		8	
平成20年度(後期)学生図書委員名簿		8	
編集後記	図書館長補佐 相本正吾	8	

## 学 科 推 薦 図 書 の 紹 介

### — 一般科目文系 —

英語科より次の2冊を紹介します。

一冊目は、『Who on Earth are we?』です。

[http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/webcast/tae\\_whoonearth\\_archive.shtml](http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/webcast/tae_whoonearth_archive.shtml)

この夏BBCがインターネットで提供した文化を考察する12回のシリーズである。キーワードにタイトルを入力すれば音声とテキストをダウンロードできる。

我々は日本文化の中に生まれて日本語を話し日本人として行動するが、そのことを不思議に思わずに成長する。物体の大小が他の物体と比較することにより相対的に判断できるように、文化的特徴も他の文化との比較において明らかとなる。ひとつの文化の中でのみ物事を判断すれば、違いを認めない狭量な人間になるかもしれない。それを避けるには外国語をひとつ学んでみるとよい。我々は日本語の縛りから逃れることはできないが、言語は文化である。外から眺める手段を獲得すれば、いくらか自由になるだろう。日本語を話せることの自由と不自由について考えることは、文化すなわち自分について考えることである。

二冊目は、1995年発行の『試練が人を磨く』（扶桑社）。元巨人軍投手・桑田真澄氏による自伝である。幼い頃の思い出や学生時代、それと巨人時代の苦労話を中心であるが、私には身体的鍛錬を要する英語習得にも充分通じるものがあると感じられた。巨人の桑田といえば「暗い」「不気味」等の肩書きが付いてまわっていたが、これを読むと、一人の人間として一貫していた著者の成熟した考え方に驚かされる。心から野球に打ち込み、まさに直球勝負であった彼の人生は、目標も無く、ただ何気に生きている我々にひとつの生きるヒントを教えてくれるのではないだろうか。野球を知らない学生にも、是非読んでほしい一冊である。

社会科より次の二冊を紹介します。

一冊目は、池田晶子著『14歳からの哲学 考えるための教科書』（トランスビュー）です。本書は、「自分とは何か」「死」「心」「体」「他人」「家族」「友情と愛情」「恋愛と性」など30のテーマを取り上げてい

ます。これらのテーマは、誰も皆、生きていくうえで必ず考えざるをえなくなるテーマばかりです。人は皆、思春期を迎える頃から死ぬまで、自分の人生について絶えず考え続けなければなりません。青春期の皆さんも、著者の語る言葉に耳を傾け、共に思索する時間を過ごしてみてください。きっと、それまで気づかなかった新しい自分に出会えることでしょう。

二冊目は、最上敏樹著『NHK人間講座 いま平和とは「新しい戦争の時代」に考える（2004年10月～11月期）』。著者は国際法を専門とする。地域紛争やテロが頻発する冷戦終焉後の現在の世界に生きる私たちにに向けて、「平和」の意味やあり方について語りかける。東京の大学で非常勤講師として歴史の授業をもっていたとき、毎週楽しみにこの番組を視聴し、いろいろと考えさせられた。平和研究の課題として、現在では非軍事的な社会問題（貧困・人権・平等など）にまで関心が広げられているという点が印象に残った。なお本テキストは加筆され、岩波新書新赤版1000番という節目の巻となって刊行されている。

国語科より次の2冊を紹介します。

一冊目は、星新一のショートショートです。新潮文庫でいまだ十数冊刊行されている彼のショートショート集のどれでもよいので、手に取ってまずは読んでみるとよいでしょう。文章は平明ながら、必ず末部に意外な展開やオチがあるので読んでおもしろく、かつ、人間や社会へのそれとない風刺が効いていて読んで人間や社会について考えさせられます。

二冊目は、山田繁伸著『おおいたの歌碑を歩く』（大分合同新聞社）です。おこがましくも自著紹介。大分県内の歌碑80基を数年にわたり見て回りました。その時の紀行文集です。読みながら、短歌を楽しく味わってほしいと思います。写真も収載しているので、現地の風に吹かれた気分になって鑑賞してください。きっと、短歌作者のこころがあなたのこころに届くことでしょう。そして、あなたのそのもやもやはすっかり洗われるでしょう。明日からのあなたは、もう昨日のあなたではありません。文学とは、そういうものです。うまく表現できませんが、「非実用ですが、役立つ」それが文学です。本書に関する質問受付中です。質問は著者へ直接どうぞ。

## 第44回大分県高等学校図書委員研修会に参加して

報告 図書館長補佐 相本 正吾

平成20年8月5日(火)10時から別府市の亀の井ホテルで開催された第44回大分県高等学校図書委員研修会に、本校から3名の3年生の学生及び引率として教員1名が参加しました。夏の暑い日中、県下の高等学校から、学校の図書委員を代表しての生徒たち、学校の司書の方々、引率の先生方が続々と会場に集合して、一日、研修を行いました。

開会式で、まず、県学校図書館協議会会長の平塚正明氏より、「図書館は学校の顔であり、智恵や情報を共有していく場として図書館を学校生活の中心に置こうではありませんか」との提案がなされました。続いて県立高田高校と鶴崎工業高校の代表の生徒さんより学校での図書館活動の紹介が行われました。鶴崎工業高校では来館者を増やすために図書委員会の方で全校の生徒に向けて独自の企画を行っていること、また、両校ではロングHRを使って一斉の読書や読書会を行っていることやカウンター当番を図書委員たちが分担して行っていることなどの報告は印象的でした。



開会式後、9つの会場に分かれて読書会が開かれました。各会場では、課題図書として選ばれた小説について司会校が独自に用意したレジメをもとに小説全体のあらすじやテーマをお互いに確認しつつ活発な読後感想や意見の交換が行われました。

午後からは、「館報講座」「ブックガイド」「切り絵」の3つのテーマに別れて技術講座があり、本校からは図書委員の梨子木君、甲斐君、里井君(いずれも3Sの学生)の3人が読書会に引き続いて別々に分かれて技術講座に参加。「館報講座」では、講師の指導のもと、図書委員が定期的に発行している館報の製

作が行われ、「ブックガイド講座」では、画用紙に図書館の図書のブックガイドを描き、完成したぶんを会場の前面に貼って品評し合い、「切り絵講座」では、講師の指導のもと、切り絵を施した本のしおりの製作が行われました。会場はどこも取り組みの熱気に包まれ、盛況でした。

その技術講座ののち散会となりましたが、県内の学校の図書委員が集まって行った研修は、参加した3人の学生にとって、他校の図書館活動のことを知り、メイン会場の入り口に並べられていた館報を見るなどして、いろいろな面で今後の図書館活動の刺激や勉強になったと思います。参加した図書委員の学生の中から今後の本校の図書館活動のリーダーが現れることを期待しています。



### 図書委員研修会に参加して 3S 梨子木 亮太

大分高専の学生図書委員の代表の一人として参加しました。三班に分かれた午前の読書会では、『泣き虫しょったんの奇跡』という本について、大分県内の諸学校の生徒さんたちと感想を述べ合い意見を交換しました。内容は、司会校の用意した穴埋め式のあらすじを書いた紙に、他の学校の生徒たちが話し合っただけでその穴を埋めていくというものでしたが、テンポよく、和気あいあいの空気の中、話し合いが進み、たのしく意見を出すことができました。午後は、私は切り絵の実習を行いました。講師の方にハサミの動かし方を教えてもらい、いろいろな切り絵を作りました。最後には、自分達のオリジナルのしおりに作り、それを記念にもらいました。このたびの研修で見聞し学んだことを今後の図書委員会活動に少しでも活かしていけたらと思っています。

## 小さな自慢

都市システム工学科 亀野 辰三

私の小さな自慢は、小学校・中学校・高専時代のいずれも図書館の貸出冊数が1位であったことです。3歳の頃、肺結核に罹った私は（上の兄弟2人は肺結核で死去）、危うく一命は取り留めたものの、運動が禁止されたために、本を読むしかすることがありませんでした。幼年期から小学校3年生頃までは、近所の子供たちがワイワイ言って遊ぶのを見ながら、私は家の中でいつも一人ぼっちでした。そのような環境の中で、私の最大の楽しみは祖父が本屋さんで買ってくれた本を読むこと。すでに小学校4年生の時には、授業中にこっそり『大学課程 日本の地理』（こんな書名でした）を読んでいて、先生に怒られた記憶があります。また、図書館からはダニエル・デフォーの名作『ロビンソン漂流記』とかの冒険物をたくさん借りてきて、毎日毎晩ひたすら本ばかり読んでいました。それやこれやで自宅の食卓はいつも本がたくさん並んでいたそうです（当時、勉強部屋とかはありませんでした）。

中学に入学しても激しい運動はできなかったのですが、少しは運動ができるようになり、軟式テニス部に入りました。結構上達が早くて、新人戦でいきなり県体に出場したりしました。でもテニスはほどほどにして、暇を見つけては図書館で借りた歴史物を読んでいました（読書はいつも食卓）。高専に進学した時、同級生に哲学の本を読んでいたのがいてビックリ！（初めて出会った「スゴイヤツ」）。しかし、『この男には負けないぞ！』というファイトが湧いてきて、図書館から固い本を借りて読むようになりました。高専時代は5年ありましたので、結構色々な分野の本を読むことができました。思い出に残っているのは社会経済分野で『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（マックス・ヴェーバー）、社会派小説で石川達三（『青春の蹉跎』は必読！）と高橋和巳の作品（『悲の器』は傑作！）、この二名の作家に出会えたことは幸運でした。また、宗教にも興味を持ち、新約聖書や旧約聖書は全篇読みました。少々背伸びをした青年期でしたが、今振り返れば、読書の習慣がついたことが私の人生の最大の収穫と考えています。現在も老眼鏡のお世話になりながらも、せせせと読書に勤しむ毎日です。

## これからの学生図書委員会

制御情報工学科5年 鈴木 克也

7月のことです。いわゆる「ライトノベル」の購入について、学生図書委員会による討議が行われました。学生図書委員会会議をディベート形式で行ったのは、たぶんこれが初めての事です。最初は意見がぶつかり合って紛糾していたのですが、途中から互いの意見を尊重するようになり、参加者全員が納得する形でこの問題に結論を出す事ができました。

図書委員の仕事と言えば、クラスへの配布物を取りに行ったり、ブックハンティングに行ったりするくらいだと思われがちだったかもしれませんが。しかし本来は、図書館について考えることも図書委員の仕事です。今回の討論は、そういう意味でも非常に大きな前進だったのではないかと思います。

とはいえ、このライトノベルの問題も、一般の学生から提起された問題ではなく、学生図書委員会運営側が提起した問題でした。ですが、各クラスないし学生個人からの意見を受けて、学生図書委員会が議論を行うという体制が整っていて然るべきです。それこそが、学生が図書館について考えることの意義であり、これからの学生図書委員会に必要な側面ではないでしょうか。

学生図書委員会が図書活動に活発に取り組むことができるかどうかは、委員長にかかっています。つまり委員長にはそれだけの責任があるわけですが、すべての委員長にやる気があるとは限りませんし、やる気がある委員長でさえ諸事情で十分に動けないということが往々にしてあります。ですから、円滑な活動が行えるような体制をしっかりと整えることもまた、必要なことだと言えます。

昨年の4月以降のことを振り返ってみると、自分がやってきたことが図書館の活性化に繋がったとはまだまだ言えません。だからこそ次の代には、この2年間の活動を踏まえて更に一步、踏み出してしてもらいたいと思います。

最後に、副委員長の工藤宏幸君、橋本奈緒子さんはじめ、近藤祐輔君、田中雄太君、丸山志保さん、神志那優花さん、里井大輝君、梨子木亮太君、木田悠介君が、委員会運営に協力して下さいました。他にも、図書館に積極的な意見を出してくれた図書委員さんや一般学生さんがおられます。それらすべての方々に、深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

## 本校留学生の地域でのスピーチ

### 大分の思い出

電気電子工学科5年 ジャヴェッド

今から3年前の春の暖かい日に羽田から大分空港に来ました。そのとき、始めて空港からホーバークラフトに乗り、高速で海の上を走るのに「びっくりしおん」間に大分に着きました。大分の町は東京に比べて高層ビルなどがなく、のんびりしたような町であるというのが私の第一印象でした。その後、大分の町に「住んじゃった」が、大分の人々はやさしいと感じました。しかし、大分の人々の言葉にはびっくりしました。私が東京の日本語学校で勉強した言葉とまったくちがう言葉話を話しているのです。

その言葉は学校内や学校外でひんぱんに飛びかっけていました。これが大分の独特の方言であるということを知りました。でもその方言を理解するのに苦労しましたが、みんなは親切に教えてくれました。「よだきい」とか、「…けん」という言葉は特に印象に残っています。

また大分は、すぐ近くに海があり、山もあり、温泉もあり、自然に恵まれている素晴らしいところです。私も田ノ浦ビーチや高崎山、別府や九重(くじゅう)の温泉にもよく行きました。

学校の寮生活のことを言えば、寮生は大分県内のいろんなところから来ています。そのいろんな地域のことや文化を教えてもらいました。また土日祭日には、友達とレクリエーションやスポーツで楽しいひとときを過ごしました。試験前になるとみんな真剣になって勉強のことを教え合いました。非常に楽しい寮生活でした。

大分での2年半の思いを振り返って見ると、大分弁で苦労しましたが、今では、友達同士でしゃべるときには自然と大分弁が「出おん」のです。

私は数ヶ月後に東京の大学で勉強することになりますが、大分は私の第2の古里です。私は大分にまた来るのではなくて、帰ってくるという気持ちを持ち続けて行きたいと思っています。〔留学生日本語スピーチコンテストでのスピーチより〕



### モンゴルの家庭

制御情報工学科3年 アリー

皆さんはモンゴル国のことをよく知っていますか。たぶんモンゴルと聞いたら「東西南北に草原ばかりが続いている」あるいは「中国の一部だ」と思うかも知れませんが、残念ながらそれは少し違います。モンゴルという国は1921年に独立して、今日本の4.5倍ぐらいの面積の土地で約270万人のモンゴル人たちが住んでいます。

さて、我が国の田舎の生活について話しましょう。モンゴルの冬は普通-30度になります。そんな寒さの中で暖房のない人々は冬も夏も秋も春も「ゲル」と呼ばれる家に住んでいます。外に出る時は暖かい服を何枚も重ね着しますが、驚くことにゲルの中ではTシャツだけでも結構暖かいのです。春、秋学校で忙しい子どもは冬休みになると家に帰り、家族と一緒に過ごします。家の仕事を手伝うチャンスは年に3か月しかない子供たちにとって冬休みは大切な時期です。男の子はお父さんと一緒に家畜を連れて遠いところに行きます。女の子も同じようにお母さんやお姉さんと一緒に過ごします。

家族がみんな一緒にいる時は美味しい料理を食べて、よく休んで、色々な話をします。そして冬にしか見られない星を見たり、数えたりします。ゲルの窓は天井にあるのでゲルの中からもよく見ることができます。そういったあたたかい雰囲気の中で、親を尊敬してやまない子供たちも家族がみんな一緒にいるその時を大切にしています。田舎では、家畜を大切に、生まれたときからずっと動物を見て育つ子どもたちにとって、子ヤギや子馬、子羊などがペットです。そういう動物と過ごすことで、幼い時から「死」ということを体験する子供たちは、友も親も自分もいつか死ぬという事実を知っているわけです。ですからみんな親がいるうちに世話してあげて、よく学んで、いい思い出を作り、やさしい人間になるのです。

私の国では家族のつながりはこんなにも深いものです。私も、もし親になったら、一度だけの人生のたった一つの家族ですから、家族を大切にしていきたいと思っています。

〔明野地区 家庭の日 推進大会でのスピーチより〕



## 思い出の一冊

### ひとりっ子

グレッグ・イーガン 著 山岸真 編・訳  
制御情報工学科 徳尾 健司



数学の定理というと、完全無欠な、永遠不変の真理のように思われるかもしれませんが。1920年代、当時世界屈指の大数学者であったダフィット・ヒルベルトは、「数学が矛盾を含まないことを数学の体系内で証明する」という壮大な計画を提出しました。ところが

まもなく、若き天才クルト・ゲーデルによって、その夢は打ち砕かれてしまいます。ヒルベルトの目論見とは逆に、「数学は自己の無矛盾性を証明できない」という驚くべき事実が証明されてしまったのです。これが有名な「ゲーデルの不完全性定理」の帰結の一つです。

現代SFの旗手グレッグ・イーガンの短編集である本書は、「人工知能」と「自由意志」、あるいは「意識」と「量子論の多世界解釈」といった問題に鋭く切り込む一連の作品により構成されています。なかでも「ルミナス」は、SF(空想科学小説)ならぬMF(空想数学小説)とでも言うべき秀作で、抽象的でなかなかイメージしづらい現代数学の世界を鮮やかに描き出すことに成功しています。

「数学の定理は、物理的系がそれをテストした場合にのみ真となる」——これは、決して荒唐無稽な小説上の設定というわけではありません。人間によって証明可能な言説のみを真とする「直観主義論理」や、物理的に検証可能な言説のみを真とする「量子論理」といった、論理学研究の一端をなすテーマとも重なるものです。ある言説Sを“真”であるとテストして、その後、有限の論理的ステップののちに矛盾点、おそるべき“非S”に到達したら——我々の数学は崩壊してしまうことになります。主人公たちは数論の<不備>のマップを作成し、“此方側”の数論を守るべく光コンピュータ「ルミナス」に向かいます。ワークステーションの画面には、言説のネットワークが錯綜した三次元の格子として表示され、“此方側”と“彼方側”の数論がフラクタルな境界線上で領地を獲得したり喪失したりと、ウォー・ゲームさながらのせめぎ合いが展開されます。永遠不変だったはずの真理が、チェスの駒のようにひっくり返っていく様子は圧巻です。

### デカルトの密室

瀬名秀明 著  
電気電子工学科5年 工藤 宏幸

「自己とは何か？」誰しも一度は考えた事のある命題かもしれません。本書もこの命題に人工知能という面から迫ります。物語は人工知能の性能を競うコンテストで起こった事件を核に進んでいきます。

そのコンテストとは、「チューリング・テスト」と呼ばれる実験を行うものです。その実験方法は、何名かの判定者とその判定者達から隔離された2つの密室を用意し、片方に人間、もう片方に人工知能を入れます。判定者達はコンピュータ端末を通じて、それぞれの部屋と一定時間チャットを行い、どちらの部屋に人間が入っているかを当てる、というものです。コンテストでは、この実験結果を基に人工知能の性能を競います。作業としては実に簡単ですが、内容としてはとても興味深いものです。この実験の意義を考える事や、実験方法を少し変える事で、様々な謎が溢れだしてきます。

この実験の意義は、「もし、人工知能が人間と同じように思考できるようになったとして、どうやって人間にそれが気付けるのか？」という事です。この実験で、大多数の判定者が「人工知能の入っている部屋の方に、人間が入っている」と判断した場合、少なくとも、「この人工知能は人間と同じように思考できていない」と断定する事は出来なくなってしまいます。そう考えると、人間と機械の境界の意外な曖昧さに気付かされます。また、実験方法を、判定者に「人工知能だと思う方を選ばせる」ようにしたらどうなるでしょうか。「人間らしさ」を競うコンテストを「機械らしさ」を競うものに変更するのです。それによって、判定は格段に難しくなるでしょう。何故なら、「人間は人間であるが故に機械の立場に立つことは出来ない」という檻が存在していますから。物語中には、この様な「機械の密室」と呼ばれる檻の他にも、表題である「デカルトの密室」や「宇宙の密室」が紹介されています。この様に、本書を読んでいると次から次に謎が提示され、何度も本を閉じ、思考する事態に陥ります。

物語の冒頭でも述べられていますが、本書は、「知性」そして「謎」についての物語です。思考する事が好きな人、「自己とは何か？」を考えてみたいすべての人にお薦めする一冊です。

## 私の推薦する図書

### スカイネットの超極限!! ナンプレ 超難問編

スカイネットコーポレーション 著  
制御情報工学科 金田 嗣教



委員の先生から原稿を依頼され軽い気持ちでいいですよ、と引き受けたがよく考えると思い出の一冊となるような本が思い当らない。前回、十年以上前だろうがシドニィ・シェルダンの全集を紹介した記憶がある。それで最近ハマっている本、本とは

はいえないかもしれない「ナンプレ」ナンバープレース、数独について紹介します。

これは数字クイズで朝夕の通勤電車の中で解いています。以前は周囲に同じことをしている乗客がいると照れくさくて本を引っ込めたが今はなんともありません。これは正方形 $3 \times 3$ のマスにいくつか数字を前もって与え、残りの空マスを埋めるものです。その一組の小さな正方形でまた $3 \times 3$ の正方形がつくられ、全体として $9 \times 9 = 81$ の中で空いたマス目を正方形、タテ、ヨコそれぞれ1から9の数字で埋めるものです。前もって置かれている数字が少ないほど難しいわけでこの超難問編だと24個しかありません。調べてないがもっと少ない難問もあるでしょう。24個より多くても易しいとは限らず発見できないときはいつまでも解けません。何日かけても出来ないときはgive upです。矛盾なく全部埋められると正解を見る必要はありません。

学生とバスで一緒になる時に解いていると、学生にもファンがいるようで、やらせてほしいというのでページを破いたり、コピーしてやらせます。この学校は結構そんな学生が来ているなと感じます。ナンプレの効果は集中力が身につくことです。20分～30分新しい数字が記入できないときはしばらく休んで再開するとぱっと発見できることが多く、これは数学の問題を解くことにも通じています。学生の試験の答案を見ると不注意ミスでの失点が非常に多く、じっくり考える訓練が出来ていない。ナンプレはこれらの解消に役立つはずで

### 10年後の自分が見えるヤツ 1年後の自分も見えないヤツ

落合信彦 著  
制御情報工学科 松本 慎平



皆さんは、10年後どんな自分になっているか、どこで何をしているか、想像することができますか？少なくとも、この本に出会った頃の私は、1年後の自分すら完全に見えないヤツでした。この本のおかげで、自分の将来を描けるようになれました。私の人生を変えた本と言っても過言ではありません。

当時、大学4年生になろうとしていた私は、典型的な駄目大学生を謳歌していました。バイトや遊びなど快樂の限りを尽くす毎日でした。学校に真面目に通った記憶がありません。しかし、現実は何も待ってくれず、私の目の前には進路の決定という人生の決断が迫っていました。友達が就職セミナーに通い始める中、未だ自分の人生ひとつ決めきれない極めて甘えた人間でした。何をして良いか途方に暮れていた折り、この本に出会いました。

この本が教えてくれたことは、たったひとつ、当たり前で、単純なことであるけれども、しかしなにより大切なことでした。それは何かというと、すべての結果は、自分の責任であるということです。環境や他人の責任では決してないということです。たとえば、先生や親が教えてくれないからできない、不況だから良い就職口にありつけないなど、環境の責任にしてはならないということです。自分の責任を周りにゆだねている限りは、1日先も見えないことはないということを教えてくれました。そして、自分の責任を自覚し、自分を信じて行動を起こすことで人生の扉は自ずと開かれていくことを教えてくれました。この本に強い衝撃を受けた私は、責任を常に強く意識せざるを得ない環境に身を置くことにしました。その結果、特にやりたいことが見付からなかった私にも、目標ができました。また、物事を深く考える事が大の苦手で、技術に関して全くの素人であった私であっても、まだまだ理想にはほど遠いものの、なんとかここまで成長することができました。やりたいことが分からない人は、何でも良いので、まずはプレッシャーを強く感じる何かに挑戦してみましょう。何かしらの達成感が得られたら、それが全てのスタートになるような気がします。

## 平成20年度 読書感想文コンクール入選者

	クラス	氏 名	作 品 名	著 者 名
第1位	1 E	谷 岡 祥	夢をかなえるゾウ	水 野 敬 也
第2位	1 S	秋 吉 優 子	私の頭の中の消しゴム	木 村 元 子
第3位	1 C	大 谷 勇 太	カラフル	森 絵 都
佳作	1 M	山 田 師 巨	一瞬の風になれ	佐 藤 多 佳 子
〃	1 E	柴 田 真 衣	L change the World	M
〃	1 S	浅 野 早 紀	村田エフェンディ滞土録	梨 木 香 歩
〃	1 S	宮 近 沙 希	ありがとう!山のガイド犬「平治」	坂 井 ひろ子
〃	3 E	吉 山 和 志	夢をかなえるゾウ	水 野 敬 也
〃	3 S	河 野 史 織	夏の庭	湯 本 香 樹 実
〃	3 C	古 木 亜 弥 実	ベルナのしっぽ	郡 司 ななえ

## 平成20年度 貸出上位者・クラス

## ◆個人別

順 位	クラス	氏 名	貸出冊数
1 位	1AES	佐 藤 大 貴	263冊
2 位	4 S	丸 山 志 保	186冊
3 位	1 S	木 村 誠	125冊
4 位	2 E	原 康 祐	112冊
5 位	4 E	橋 本 奈 緒 子	110冊
5 位	2 E	山 田 悠 貴	110冊
7 位	2 S	福 岡 聖 二	103冊
7 位	1 E	御 幡 大 河	103冊
9 位	3 M	鞭 目 広 晃	94冊
10 位	1 S	本 田 晶 子	92冊

## ◆クラス別

順 位	クラス	貸出冊数
1 位	専攻科1年	590冊
2 位	1 E	420冊
3 位	2 E	407冊



## 平成20年度(後期)学生図書委員名簿

学年	機 械 工 学 科	電 気 電 子 工 学 科	制 御 情 報 工 学 科	都 市 シ ス テ ム 工 学 科
1年	工 藤 啓 右	武 末 僚 平	渡 辺 晶 友	内 堀 恵 梨 奈
	渡 辺 和 樹	仲 道 諒	本 田 晶 子	松 下 明 寿 香
2年	佐 藤 拓 弥	清 藤 直 紀	倉 本 雄 太	岩 本 理 歩
	米 澤 侑 生	大 家 晶	奥 津 惇 矢	河 野 雄 大
3年	清 永 遼 太	森 山 和 博	梨 子 木 亮 太	木 田 悠 介
	安 部 裕 貴	鞭 目 伸 章	里 井 大 輝	山 川 翔 太 郎
4年	近 藤 祐 輔	◎橋本奈緒子	丸 山 志 保	神 志 那 優 花
	戸 高 彰	洲 上 翔 太	田 中 雄 大	武 知 義 明
5年	横 田 尚 之	◎工藤宏幸	★鈴木克也	末 永 竜 也
	猪ノ口 愛	井 上 悠 平	谷 口 広 樹	仲 元 彰 宏

★委員長 ◎副委員長

## 編 集 後 記

学生時代に読書の習慣を身につけることはその人の一生の宝になる、というアドバイスを私たちは年配のお方からよく聞く。学生時代から広く読書している人は、言語生活が豊かであり、物の見方が広くて柔軟性に富んでいる。ある人が言うには、容姿の面から言えば、続けて一ヶ月じっくり読書を行うと、男性なら顔の彫りが深くなり、女性なら美人顔の良なお顔になって美容にも良いらしい。

極端な読書で活字中毒になることは論外として、左脳右脳の活性化をはじめ、読書や読書会、図書館や書店に行くことの効用はもっと顧みられてよいと思う。

御多忙の中、原稿を頂いた方々には心より謝意を申し上げる。

(図書館長補佐 相本 正吾)